

6 「さぬきの青ネギ」安定生産に向けた支援活動

■ 管内青ネギ生産組織など ■

(香川県東讃農業改良普及センター 横井 弘善)

●対象の概要

管内の青ネギは、指定野菜に指定され、露地を主体に約64ha（平成26年度）がほぼ全域で周年的に栽培されている。

J Aによる出荷調整支援体制が整備され、主な出荷先である京阪神市場では「さぬきの青ネギ」として一定の評価を得ている。

新規の担い手等にも取り組みやすい品目として導入されるケースが少なくないが、管内全体的には面積の伸びが頭打ちとなっている。

●課題を取り上げた理由

青ネギ栽培では、ネギアザミウマやネギハモグリバエ、軟腐病といった病害虫被害が多く、生産農家が対応に苦慮していた。

露地栽培が主体で、12月～2月の栽培は1haと全体の2%と少なく、取引市場からは年間を通じて安定した出荷の要請があり、トンネル栽培の普及を推進する必要があった。

栽培経験の浅い新規の担い手等に対しては、講習会や巡回指導などで、栽培技術の向上や機械・施設の整備を図っていくことも重要となっていた。

●普及活動の経過

1 ネギアザミウマ等病害虫対策支援

例年、春夏期はネギアザミウマによる被害が多く、秀品率の低下が顕著となっていた。平成25年は夏秋期にネギハモグリバエによる被害も多発した。

そこで、ネギアザミウマの発生状況を的確に把握するため、粘着シートによる定期的な調査を行い、生産者等へ情報提供した。また、効果的な農薬防除体系を提案し、防除体系の改善を図った。

疫病の発生が平成26年6月頃から確認され、次第に全域に拡大し、晩秋期頃まで終息しなかったが、講習会等を通じ、早期から防除の徹底

を促した。

2 トンネル栽培展示ほ設置による啓発と推進

管内では冬期においても露地のまま栽培を行い、強風による葉折れ・倒伏・葉先枯れで秀品の生産が不安定となったり、被覆資材を利用しても小面積のため生産量が確保できていない生産者が見られる。

そこで、冬期の生産安定を図るため、トンネル栽培の展示ほを設置した。具体的には、P Oフィルムとビニールフィルムを比較し、被覆資材の違いによる青ネギへの影響を検討した。



図-1 トンネル栽培展示ほの状況（資材内温度の計測も）

3 新規担い手等に対する技術支援

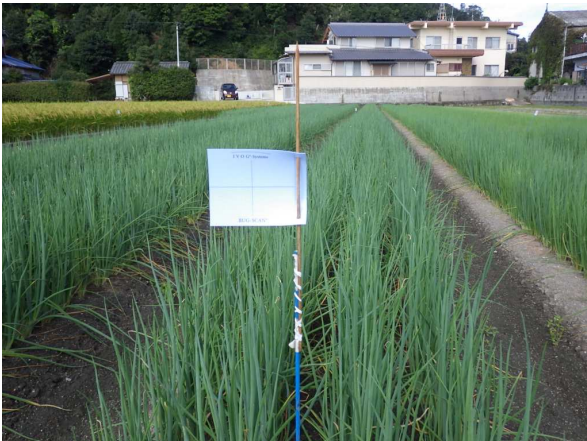
青ネギ産地の発展のためには、新規の担い手等の育成確保や経営の効率化に対する支援が不可欠である。

いわゆる「のれん分け就農」等による若い農業者が青ネギ経営に参入してくる機会も増えており、それに伴って様々な支援を関係機関と連携しながら行った。

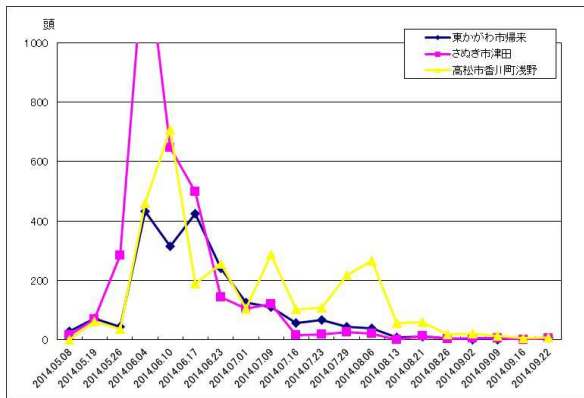
具体的には、個別巡回や講習会による栽培技術指導と、青年就農給付金に代表されるような行政機関が実施している助成措置や民間団体が実施している助成事業等について紹介するなどの情報提供や活用を推進した。

●普及活動の成果

1 ネギアザミウマの発生状況を一定期間ごとに管内3か所で調査し、そのデータ（表―1参照）を参考に、適期防除が可能となった。ネギアザミウマの初発時期や終息時期が明確になるとともに、登録農薬の効果的な使用体系を提案し、害虫の抵抗性が発達しにくいローテーション防除が実施されるようになったほか、周辺に雑草の多いほ場では、遅くまで発生が確認されるということも判明したため、雑草対策も重要であることがわかった。



図―2 青色粘着シートによるネギアザミウマ調査ほ場



図―3 26年度ネギアザミウマ発生消長

一方、ネギハモグリバエの発生は9月頃に小発生が見られた程度で少なく、こちらの害虫に対しても防除体系の提案を行ったが、特に本年は問題とならなかった。疫病については、防除対策資料を提供し、徹底防除を指導したが、夏期の長雨等の影響から防除効果が十分に発揮されにくかった。

2 トンネル栽培の展示ほ（調査期間：H26年12月6日～H27年1月27日）から得られた成果は、ビニールフィルムとPOフィルムでは、夜温はビニールフィルムが若干高い傾向があったが、

その差はほとんどなく同等レベルであったこと、昼温では、POフィルムが高いこと、調査期間を通じてトンネル内が26℃以上にはならなかったことが分かった。

収量や品質、経済的にも大差がなく、破れにくさや取扱いしやすい、換気作業の省力化などから、青ネギ栽培でのトンネル資材はPOフィルムが適していることが判明した。

展示ほから得られたデータは、講習会を通じて報告し、次年産以降の青ネギ栽培に取り入れて、市場等からの要望に応えられるよう積極的に推進した。



図―4 講習会による推進活動

3 新規担い手等には、関係機関と連携しながら、個別巡回や講習会等機会ある毎に支援した結果、香川地域で新規にトンネル栽培を開始した若い担い手や、東讃地域でこれまでビニール資材を利用して不便さを訴えていた農家がPOフィルムに更新したり、県の平成26年度新規就農者サポート事業を活用して、ネギ洗浄機等の施設整備を実施して80a増反する農業法人が出てきた。

●今後の普及活動の課題

栽培面積の維持拡大を進めるため、担い手の育成確保に努めるとともに、JAの出荷調整支援作業の充実を支援する。また、引き続きトンネル栽培等への取組を誘導し、周年生産体制の確立を図る。

春夏作型の品種探索に対する要望も出ているので、実証ほ等を通じて品種の検討を行う。

病虫害対策も引き続き重要な課題であるため、関係機関と連携しながら、適切な防除等を支援していく。